

22名の参加で南砺のカインと社叢を見る

7月19日(土)午前中、カイン倶楽部 南砺方面屋敷林見学会を22名の参加で行った。早朝、雷雨に見舞われ心配したが、うまくその雨をくぐり抜けるように南砺市院瀬見・山本 彰さん宅の屋敷林と、是安・不吹堂(ふかんどう)・級長戸辺(しなとべ)神社の社叢をゆっくり見学した。山本さん宅の村は約70戸が細長く山際に建ち、南風の吹きおろすところでカインを大事にしている地域だ。級長戸辺神社は「風の神様」がまつられている古い神社で宮司のお話しのあと、境内で和田 健さん(会員)の指導で、樹高や樹齢測定の実習をした。大古木の大きさを知らせる調査方法を知る良い勉強になった。昼前 散会した。当日の様子を富山新聞が次日報道した。

安定・重層感のある屋敷林

山本 彰さん宅の屋敷林内に入って、柏樹代表幹事が山本さん宅のカインを見せてもらうことにした理由を説明した。

- ・母屋南面の幅7m、奥行50mほどの区域にスギ大木(平均18m×84cm)10本、ケヤキ2本、樹齢200年程——狭い中に老木が入り、樹勢が良い。安定して重層感のある相観をつくる。中木も入り、ツゲ中心の生垣が外周をつつむ。カインの生息地は広くないが、元気であること。
- ・屋敷に勾配があること——平坦でない、根が深くはいる。
- ・南側の樹木を支える土地は1m以上高くなっている。防風の工夫か。母屋との間に3米余の空間がある。下層にヤブコウジが繁茂している。
- ・小面積でも、樹種の組み合わせ、勾配、樹齢差によって安定したカインをつくる見本。

このあと、親戚の山本友治さんが質問にも答え、次のようなことを話された。

- ・家は江戸時代、梅檀山から移住した。入った時には屋敷林があった。古いスギは250年ほどだ。2本のケヤキは子どもの頃からスギと一緒に大きかった。
- ・戦中の供木にアテ等を何本か出した。スギは防風林として大事にしてきた。
- ・木は、はさ木として使い、西側のスギは後で植えられた。南風で木は倒れたことはない。
- ・生垣の手入れは家の者がやっている。
- ・ここは、山風が強く屋敷林は大事なものだ。神明社のスギ古木は村で一番大きい。
- ・夏は大変涼しい。戸をあけておくと扇風機は要らない。

一同 山本さん宅の屋敷林の内部から、西面・南面の外側を踏査(とうさ)した。大変元気なカインにふれ心が洗われた。



山本宅の南西面



南面より見る



始めに、山本さん宅の特徴説明



スギの大木測樹

■天野さんがラジオで報告

7月22日KNBラジオ午後2時過ぎに今回の見学会の報告をした。

(平野部と山際部のカイン等の違いについて)

- ・平野部は扇状地で表土は数十cm。しかし、山際は山からの土石流が堆積し根は深くまで。
- ・平野部より敷地が狭く、勾配や段差がある。
- ・南の山から吹き下ろす強い風に建物の角を向ける。船の舳先と同じ。
- ・この地域の新しい家にも、山側に全てカインがある。裸の家では強風が心配なのでは。
- ・建物から3-4mにカインがある。昔の家は茅葺きで、地面に置いただけ。だから強風で家が動いたり、倒壊する。カインで強風を防ぐ事が一番重要。
- ・平野部のカインの役割は、防風林・燃料・建築資材・食料薬草。
山際部のカインの役割は、大部分が防風林。幾分は食料薬草か。山際なので、燃料と建築資材を容易に確保。
- ・生活出来ないくらい風が強いので、風の神様を祭る神社も出来た。(天野一男事務局)

かつてはうっそうとした樹林の土地 —おもかげを伝えるスギにあう—

級長戸辺(しなとべ)神社の社叢は大変小さくなり、かつての社殿全体を包んでいた300年近いスギ大木は、僅か10本、ケヤキ2本が残っていた。社殿入口右手に中低木も含めた社叢を作る。大きくなった社殿を包むスギは少ない。奥部本殿左側に樹木がみられなくなった。かつてはうっそうとした約1.5haの樹林の中に「風の神様」を祀ったもので、夜などは恐怖感のただよう区域であった。

拝殿で山田宣道宮司のお話を聞いた。(別項)そのあと和田健さん(会員)の測樹の手ほどきを境内の大樹を使って受け、社叢についてのお話を聞いた。

和田さんから 測樹の手ほどき

色んなところで大木、古木と出会い感銘して帰るがそれをどう伝えるかだ。何によって現わし伝えるか。一般的には高さ、太さ、樹齢で表現する。高さは測高器で出すのが一番正確。太さは胸高直径(1.2mのところ)の周囲(直径)を使う。樹齢はその木の近くにある伐根の活用もしくはキリを樹幹にさし年輪の一部を取り出し半径を積算しておおよその樹齢を予測する。神社の中心にあるスギを計測した。直径1.7m、樹高28m、樹齢250年と測定した。そのあと、和田さんの社叢についての短いコメント——もっとうっそうとした樹木に包まれていたが、大変少なくなった。木を痛め、少なくする原因は参道、玉垣、社殿新築で地面を掘り起こすことだ。灯笼の寄付等はおろかな見本だ。樹木の枝の張りめぐらす直下まで根が張っている。それを十分考えておくことだ。



スギの大樹の幹周りを測定



境内とスギの大樹と代表からの挨拶

■■ (お知らせ) どうぞ参加して下さい ■■

8月23日 午前9時から散居村ミュージアムで「樹木の剪定講習会」

<別掲>

不吹堂(ふかんどう)・級長戸辺(しなとべ)神社 山田宣道宮司のおはなし

この神社は1,675年(延宝3年)に創建された。その約10年前から大凶作で悪病が流行、被害村180有余村になった。そのとき、十村役が中心になり加賀藩に山田野の御用林5,294坪を神社境内として拝領を願い出た。そこに風の神様を祀り、その後豊作となるようになった。神社は180ヶ村に万雑割をして建設維持した。現在も氏子がなく、全砺波からの敬神会で護持している。一般的に不吹堂大明神とって来たが、明治に入って社号を級長戸辺神社とした。昭和60年に本殿が改築された。

各地に風の宮「不吹堂」があり、その総社の役目もはたしている。神社には、沢山の文書、木札があり、この土地の風の神様として長く祀られてきた。

<投稿>

神明社の社叢

神明社の社叢は、村の大事な誇りであり、財産であった。その樹木のかたまりは、あらゆる生物のすみかとなっていた。人々が近づくために、「おそれ」と「うやまい」を持ったし、「天狗さまが住んでいる」といって子どもが遊んでいても夕方近くには引き上げた。

大水害で橋が失われたり、大火災で寺を失った時、村民の相談で社叢から何本かぬき伐りし使った。また鳥居や、社殿の用材として使った。神明社の樹木は村人の心のよりどころで崇敬の対象だった。秋祭りは収穫の喜びと感謝の気持ちを込め、沢山の村人が木の下へ足を運んだ。獅子舞や夜は踊り等が催され、にぎわった。当時の社殿は小さく、神様の鎮座するお堂と狭い拝殿がすっぽり樹林に包まれていて、村人の集う前庭が静かで重宝な空間であった。明治以降次第に社殿が改修され、参道・灯笼・玉垣が造られ、いつの間にか神社の象徴と魂が樹林から人間のつくった「物」にかえられた。

特に戦後、昭和40年代からの変化は急で大きくなった。人の造ったものが大事になり、各所に大きな寄贈者名が記され、樹木は不要な物となった。まるで金持ちが神に近い人のように扱われ、神社の行事は宮司と一部の世話役の仕事となり、祭りはすっかり村人から離れてしまった。多くの方は稼ぎにおいまわられた。神社へ足を運ばず大変に遠い存在となった。社叢に関心がなくなり、人の心も地域の共同心もなくなった。

見学した級長戸辺神社で和田健さん(会員)がくしくも「玉垣や灯笼は樹木の命をおとす最大の原因だ」と言われ、一同苦笑でごまかしたが、その当たり前のことを厳しく胸に受け止めねばと思った。かつては、この神社前の道も夕方になると怖くて歩けなかったほど樹木が茂っていた。和田さんの思い出からするとあまりにも少なくなった樹木のあわれな社叢になったことへのなげきを吐露されたものだった。

カイニヨの減少は神明社の樹林を少なくし、心のすさんだ人を増す。このあさはかな思考をたちきり、ただすために、神明社に木を植え、元気な社叢をつくる。このことが本当の地域の生き抜く共同心を育むことにつながるのではなかろうか。

(柏樹 直樹)